

いづみ

特集号

1989年8月

# 私の戦争体験

第11集

「このもの明るい未来のために語り継ぎます

## 恵子、ごめんね

●羽曳ヶ丘支部

矢木千津江



昭和二十年、戦争はなんだんと厳しくなり、少しでも安全なところに隠避をする人が増えてきました。私のところも日暮の山手の奥深い所で過ごして居りました。父は召集され、広島の第二砲軍指令部に配属されました。弟は学童疎開で、妹は私より二歳下で広島女学院一年生、私は市立高女四年でした。八月六日は晴天で朝早く何時もの様に勤員先の爆心地から一・七キロの横川駅近くの住野工場、地下たびのはせを作る所に行って居ました。空襲警報になり防空壕に入つて居ましたが、解除になり機械について作業をして居ました。

突然東の方から稻妻のよろこピカッピカ光

ったと同時にドーンとの凄い轟音がしました。工場の大きな建物は一瞬の間につぶされました。下敷になりしばらく氣を失つて居ましたが、ふと我に帰り塵埃の下からやつとの思いで這い出しました。あたりを見廻すとなく焼けたたれ、血みどろの人々が阿修羅の如く何かをわめきながら石任せ住しているのです。死んでる人も居ます。まるで見たことがない地獄の様でした。早く安全なところに逃げなければと必死の思いです。全身やけどで手の皮膚がたれさがり、両手を前に出して歩いてる人、歩けなくてねぶさつてもらっている人、看板にのせられ死にかかっている人、親から離れ独りぼっちで泣きながらおひえている人、言板にのせられ死にかかっている人が、あがり、見る見るうちに火の海です。にげ切れなかつた人は川にとびこみ、多くの人が死にました。建物の下敷になつて出られない人も助け出す人がなく、やけ死にました。何時もは静かで美しい山が、その日はたゞて来

た人で一ぱいです。重傷の人を手当する人もなく、ころがされているのです。みな自分の車だけで精一ぱいだったので。私も放心状態で夢でも見てる様でしばらく立ちすくんで居ましたが、震震の肉がはげしく降つて来て全身ずぶぬれになり、顔や手がひりひりして痛いのです。顔と両手をやけどして水をくれになつて居るので。震震の光で、やられたことを私自身も血みどろになつてるので。

ひとをどの様に歩いて帰つたのか、山の家にたどりついていました。山の家も家具はひづれかえの日がみなみじめられてしましました。父はその日体の調子が悪く暴食でねむんで居た為、難をのがれましたが出来ました。妹は爆心地から一キロ以内の雑魚場町へ、学校から隠避あと整理作業を行つたまま帰つてこないので。両親は焼跡に悲嘆のする死体の中や焼けたたれ誰が誰かわからなくなつている群衆の中をさがしまわりましたが、みつかりませんでした。

三日後に、一キロ以上離れている共済病院に居ると言ふ情報を得てすぐに両親はどんで



行きました。生きてる事を信じて居ましたのに、行って見るとごみ箱の横に横たわり死んで居るのです。あまりの悲しさに二人は泣いて居ました。

病院の看護婦さんが、そこはきたないので少しでもきれいなところに連れて行ってあげ

よつと体を動かそうとする、全身やけどな  
ので痛いのでこのままにしておいてくれと言  
ったそうです。まわりには同じ様な人ががさう  
と並んで居るので、「水下さい」「私の家  
に知らせて下さい」とだれもが言って居るの  
ですが、妹の恵子は「一番大きな声です」と叫  
び続けて居たそうです。どんなにか死ぬ前に  
一目親に会いたかったのでしょうか。「私は広島  
女学院二年の八木恵子です」家は己斐中町十  
六番です。誰か知らせて下さい」とばらく  
それを繰り返していましたが、父は軍人だから  
知らせてもらえると思ったのか「父は第二  
陸軍指挥部の上等兵、八木勝蔵です。誰か知  
らせて下さい」たくさん同じ様な状態の人があ  
いるのに特別目立っていたらうです。三時間  
前に息を引きとった事を云つてくれました。  
妹はまだあたたかく全身やけどのどろどろの  
体でしたが、水できれいにぶくと新じゃがい  
もの皮をむく様に皮がするつとむけ、きれい  
なうす赤色のある美しい顔になり、持つ行  
ったゆかたを着させ、「恵子ごめんよ。一生懸  
命生きよう」とがんばり、待つていたのに――  
たまらなくなりますが、死体の引きとり手も

なく誰かれのみさかいなく次々と焼かれて行  
く大勢の人々と比べてせめてもの慰みでした。  
祖父は、「隠居はいやだ」と山の家に来な  
く住みなれた家近くで焼け死んでいました。  
お世話になった担任の先生や友人、親戚の  
多くの人を失い、原爆や戦争の恐しさを身に



しみて感じました。知らない人にわかつて頂  
けたらと、下手な文筆ですが折りながら書き  
ました。

た。

毎日、晨、夜と言わず、ぐり返される「空  
襲警報発令」のサイレンの音。人の呼び声が、  
私達をおびやかして居りました。其の頃私は、  
看護婦として和歌山市の産婦人科院に勤めて  
居り、仕事の時間をさいで、町内から色々な  
訓練にかり出され、バケツリレー・竹槍でわ  
ら人形を力いっぽいづく、と言う日々が続き  
ました。

戦争が激しくなるにしたがって、病院では  
入院患者数もなるべく少なくていいまま

真夜中など西のに星の様に明るくメラメラ

## 「この世の生き地獄

●新家支部  
横田ひとみ



今私の脳裏に、終戦前の七月九日の夜の悲  
惨な光景が思い出されます。けたたましいサ  
イレンの音と「空襲警報発令」の声を聞いた  
のが午後の八時頃だったでしょうか。私は、  
「ああ又か」と思いながらも防空笛と非常  
カバンを肩にぼんやりとして廻りましたが、  
何時もと違った人の動きと、先生の「防空壕  
に入れ」との一喝であわてて防空壕の近くま  
で行ったのですが、ものすごい飛行機の音と  
ともに空が真赤になつたとん、火が雨の様  
に落ちて來たのです。先生と数人の看護婦さ  
んと一箇に裏通りへ飛び出した時「右へ行つ  
たらダメだ」と怒鳴る先生の声を背に、落ち  
て来る火の粉の為皆バラバラになつて、私は  
どこをどう通つたのか、気がついた時は市の中  
を流れている尼川に入つていました。

両岸は人と人とが重なり合つてうざめき、  
叫び声やら泣き声の中、火の粉をほらいなが  
ら首まで泥水に入つて居りました。我が子を  
泥の中にのみこまれて泣きわめく娘、頭と顔  
が焼けたたれてる人。そのまま息絶える人。

燃えさかるほの火を、ほんやり眺めて居りました。夜が明け青空を目にした時、はじめて「助かった」との喜びと田舎の父母の顔が目に浮かび涙が何時も流れました。

焼き尽くされた和歌山城のお堀の側に数知れぬ死体が並べられ、親にはぐれた子が泣く事もなくヨロヨロと歩いていました。エビの様に手、足がまがり焼け死んでいる姿、衣服は焼け、おんぶして子供の皮膚が背中にくっつき、前のめりに倒れて息たえてる人。地獄の様な光景の中、私は罹災証明を取る為に時戴けるともしれない列に加わりました。頭・手・足と真黒な水痕の痛々しい人、首無言で立っていました。午後、雨ひなるサイレンの音にも、皆逃げる事もなく唯ぼうぜんと立つていました。

今こうして戦争の体験を書いてみましたが、言葉で言い表わしたり、文に書き表わせるものではありません。其の恐しさを本当に表わせないからです。私は今六十歳。思い出しただけで思がります。

戦争なんて二度とおきない事を祈ります。

●柏原支部  
富森そのえ



南の故郷！鹿界島、俊賀（曾根）が流された島である。

いよいよ大東亜戦争が押し迫って来た昭和十九年、学校の授業も短縮され、当時三年生だった私達は、防空壕掘りの手伝いや避難訓練等の日々が続き、とうとう学校の鐘（子ヤイム）も軍事製品を補うべく国へ奉納された。

刻々と緊迫した空気が漂った、小さな村にも兵隊さんの姿が目立ち中でも若い特攻隊員はりりしく見えた。十二月になると西風が吹き荒れ東支那海に面した小野津の海岸に、幾人の兵士の死体が漂流して来る。その度に村人にはじって恐々と見に行つたものです。

す暗くひんやりとして、大小幾つものかめがあり、その中には人骨がいっぱい埋まっている木が生い茂つていて、木の間からは飛行場の爆撃がよく見える。あの白…続けざま三機撃墜され、まれに見る胸のすく光景である。それにしても、敵の飛行艇がやつて来て、飛

波にさらされ伏す兵士の姿は無残で哀れであった。幼い心中に、戦争という残酷さが身をねねつた。又、兵の広場では勇ましく母親達の竹やり訓練！かすりのモンベに白い鉛筆をしめて…それで敵の兵隊が射殺されるものがど、今や笑い話にもならない。

めまぐるしい情勢の中で、昭和二十年を迎えた二月二十九日、八時半頃東の方から爆音が聞え、上空に達した時は十八機を数えた。遊んでいた義夫くんとバンザイを叫びながら野原へ駆けてゆき、義夫くんはすばやく木によじ登った。とたん飛行場の上空でドンドンドン黒い噴煙が上る。「空襲だ空襲だ」とふるえる足をひきつり、家の防空壕へ入った。耳がはりさけんばかりの爆弾の音、ゆれ動く上から土が落ちて来る。ようやく爆音がやみ出でると、破片が爆風で散乱している。そのうち…と山の防空壕へと急ぐ。初めての空襲の惨事に、人々は身をひそめながらつめたい防空壕の中で一夜を明した。

多くの村人が死傷し、それから相つぐ日29の攻撃で、村は焼きつくされた。こうなっては一番安全地帯とされる祠町へ移った。う



行士の救助か、死体を探すのであるうか、一日海上をすべて走っている。それに向けて大砲を発しないのにいたたしく思った。…もう底をついた軍備に余裕すらなかつたのであらうか。

それから四月に入つてよく雨が降り続きた（その頃の雨を「桜梅雨」という）。その頃、突然軍の指令により島民は一せいに萬能山（島の中央にある森林）へ避難する様命ぜられ、降り続くぬかるみの道をたどりゆく。途中の県道には五六米おきに地雷が埋められ、とうとう最後の手段が備えられていた。もづ「この村の道も二度と踏む」とが出来るのうか」大人の言葉を耳にしながら、小さな胸はふるえるのでした。すでに島のはるか沖合には、敵艦がはり巡らしている。…ようやく萬能山へたどり着いた。

しぶしむ降る中、入でひしめき合つ。…大きな岩がからみ合い、そこを利用しての粗末小屋の生活。今日が明日かと落ち者かぬ命を保つうかと一週間が過ぎ、奇蹟にも避難解除となつた。再び村の洞窟へ戻れると思う。…まるで戦争が終つたかの様につかの間の喜びでし



た。一段落したものの戦争は未だ巣中である。（戦争の衝撃は一生忘れる）ことがないでしょう。この紙面に書きつけないほどあります。戦死の公報が来て、遺骨まで届いた父が、一年ぶり帰つて来た等……。現在の平

和に毎日祈る気持ちです。）

### あのいまわしい日々

・福井寺南支部



昭和十六年十二月八日、遊戯室で、集まつた園児を前に、田辺園長先生は、「日本は、戦争をはじめました。勝つまでは、わがままを言ってはいけません。ものをほしがってはいけません」と話されました。ついとめがねの縁に手をもつて行かれたのを鮮明に覚えていました。子供心に、何だか大変深刻な思いを抱きました。

昭和二十年八月十五日。一人預けられていました疎開先でのことです。四年生の夏休み。朝から登校していました。運動場を開拓したさつまいも畑の草とりです。いつになく「今日

はもういいから帰りなさい」と先生がおっしゃって早々に帰宅すると、勤労奉仕に田代られた親戚のお姉さん達もすでに帰つてしまつた。何か放送があるとかで一部屋に集まつてラジオを聞きました。雑音の中の玉音放送でしたが終つたあとは、ふつと力の抜ける思いと「ああもう空襲は無いのだ」と、ほつとする思いが心中を複雑に行き来しました。十歳前後の子供がその日をまさまさと覚えているというのは、やはりよほどの事だったのです。この間の数年間の思い出は、あれこれも戦争とつながっているのです。

十七年四月、国民学校に入学してから二年生の終わり頃までは、まだそれほど緊迫したこともなく、上級生の家に集まつては、慰問袋に入れる絵や手紙作りを、せつせん楽しんでいました。十九年、三年生になると、次第に世の中もさわがしくなってきて、ぼつぼつ疎開がはじまりました。家族単位の帰郷から、学校ぐるみの集団疎開。私の場合は、六甲郊外学園での資生生活でした。三学期になると、戦況も徐々に悪しく、高学生の人達は、夕食後の自習時間に聞こえてくるニュースに、か

なり敏感に反応していたようでした。私の年輪では、食料事情の悪化から、大変さを実感していました。乾燥野菜の煮物に辟易したりすいとんのたんごの数を反対とくらべたり、おやつのみかんを外皮ごと食べたり。三年生で体重が二〇kgから一四kgで普通という時代だったのです。（現在は）一一年生の平均）

二〇年三月十三日から十四日にかけての大阪市内大空襲。六甲からは、逆さ花火のように、赤い光のかたまりがすーっと落ちてパッと輝くのがよく見えました。音は聞こえません。皆親連の住り大阪を見つめて無言でした。この時孤児になってしまった多くの子供達を収容するために、六甲郊外学園から親のあるものは、帰宅を余儀なくされました。

四年生になった四月からは、高根の連線の家での生活です。知らない家族の中へ一人で放り込まれるという、今思えば大変なことも非常事態ゆえの当然のこととして全く自然に受け入れました。警戒警報のサイレンで、学校から走って帰る途中に突然空襲警報が発せられて見ず知らずの家に飛び込んだり、防空壕に日に数度も出たり入ったりの生活。高根

には、湯浅乾電池の工場があったので郊外といつても空襲が多かったのか知れません。一度帰り道の空襲で他家の門柱脇に避難した時、バリバリという飛行機同士の機関銃の打ち合いを、耳を冷やして聞きました。六月十五日の空襲では、北畠一帯が全焼です。

住吉中学（現住吉高校）に高射砲台やかもぼご兵舎があったためか、それを目かけた空襲の流れ弾でもあったのでしょうか。丁度、校舎の前に、北方向へ街は丸焼けになり、三月の焼跡どつなかつてしましました。その時両親の住んでいた家も焼け、母の右足に、焼夷弾の破片が一つは貫通、一つは直撃焼創という重傷を負いました。

八月六日、九日の新型爆弾（当時、こう表現されていました）のこわさは、子供にとって地獄が空から落ちてきたという印象で大人達のひそひそ話を聞き乍ら、動悸の治まらない思いをしました。

八月二〇日過ぎに帰阪した私は、退院した両親と、焼跡での防空壕生活です。ローランクに井戸水。それが半年以上続きました。一、

二年生の時通っていた晴明丘国民学校に転校するべく、就職先から履歴書のものに附そうとしたが、事務的な理由からか子供の帰籍ができないのです。結局四年生の二学期からほぼ一年は、学校へ行けませんでした。やつと役所の方も落ちついて、学校への籍が入った時、学校では、墨ぬり教科書を使い、ノートは家で使用済の裏用の紙を和紙にし手作りのもので勉強しました。今となってはなつかしいような気もしますが、やはり大変な時代でした。

ここまで書いて読みかえしてみると、大変、大変と連発していますが、ほんとうは当時これくらいの生活は普通で親を無くしたり本人が大けがをしたりと、もっと大変なことが日常的に起きていたのです。とにかく戦争は、世の中を不幸にします。決して勇びてしまいけないことなのです。そういう気持ちから、ここ数年、七月の平和行進には、いつも参加しています。今年も参加します。一步一步、かしこい人間であることを主張し乍ら歩くつもりです。



## 戦中・戦後を生きて

●貝塚南支部

匿名希望



月日は流れ、又八月十五日がめぐって参りました。四十数年は、またたく間に過ぎ去るうとしています。

昭和十二年七月七日、支那事変が始まりました。

九月一日に第二学期が始まり、学校は出征していく兵隊さんの宿舎に成り、二部教育が別の学校で有りました。またその当時は戦勝につぐ戦勝でした。北京、南京の陥落で、町は、提灯行列や旗行列で賑わっておりました。支那事変から大東亜戦争に突入して約八年間でした。物資もだんだん少くなり、米は一日二合三勺で飴えをしのぐ様になり、大変でした。

こんな体験は二度とイヤ！

●藤井寺南支部  
藤田良子



今日の生活は、あの時をふりかえると夢の様です。やうどもっと物を大切にしたいと思ひます。

女学校も学業半ばして勤労奉仕や被服所に手伝いに行きました。

私は、竹ヤリの種古もさされました。町かどや学校には、千人針をたのみにくる人も有りました。その中でも、皇紀二千六百年の武天奉は盛大に取りおこなわれました。



ところが古くて掃除もしないので全員がまづ掃除して、それから自分達の服など整理するのですが、柳こうりの巻を開けて座わったらもう動くことが出来ずただたまって片付けてたら、「御飯ですよ」と声が通り行ってみると「じゃがいもの中位の蒸したのが皿に二個、ただそれだけの夕飯でした。

朝起きると掃除して午前中だけ勉強して、午後は近くの川へ行って洗濯したり竹やぶをたがやして塵をしたり、洗濯といつても粘土のような土色の石鹼で洗うのですが、泡が出ず、川の水でじゃぶじゃぶして程度です。足はひるが吸いついて離れないし、皮はもろろん濡気はつけられずローンクの明りが頬りました。

そして、三日目の夜の事でしたお母さんがとても綺麗なので本堂の廊下で皆が並んで見てました。一人がシクシク泣き出したのです。そしたら一人が三人、三人が五人になり、しまいに皆が泣き出しました。先生も止めずじっと見ました。

いよいよ卒業式があるので隣居先から家に

戦争体験と言われて一番に思ったのが、集団疎開の事。小学六年の十月十四日は、忘れる事が出来ません。母に学校まで送つてもらい、リュックサック、防空頭巾を掛け、胸には住所・氏名・血液型を書いた名札を生地に縫いつけ、手下袋に勉強道具を持つて校庭に集合して、親連は駆まで送つて別れました。ついた所が、古いお寺の本堂の裏。六人一组になって、一人壹一層位の部屋。送つてもらつた柳こうりを持って部屋に入つていくと、

帰りましたら、卒業式の前日があの大坂の大空襲で、学校も私の家もみな焼けてしまいました。私は、卒業式も有りませんでした。その空襲から逃げる時、防空壕から出て二階を見たら二階の屋根は今にも焼けて下に落ちる所でした。母は私の手を引いて「早く早く」と言つてゐるのですが、腰が抜けたようになかなか歩く事が出来ませんでした。逃げもつて余所の防空壕に入れてもらい、夜の明けるのを待つて家に帰つてみると柱も何も焼けて有りませんでした。

四月から一応は女学校に行つたのですが、教科書と言えば今の新聞紙の方が上等です。わら半紙に印刷した紙を貰い、家に帰つて切つて本を糸で縫つて作つて持つて行きました。ノートなど、もちろん有りません。なんでも表が白かつたら作つて持つて行くのですが、朝家を出ても途中で空襲のサイレンが鳴るし家に帰るのですが、空襲になると電車も止まるのでよく阿倍野から鶴橋まで歩いて南大阪線に乗りました。もう二度と此んな経験は、いりません。またまたつらい思いも有り、ほんの私の人生の一頁に過ぎません。

### 戦争の傷あとは癒えず

・光陽支部

石丸タマ子



戦争と言うテーマで文を書こうと思ふと、この年になつてもまだ戦争さえたなかつたなら、あと、戦死した兄、空襲で消失した家、失つたふるさとを思い、「あの人今頃どうしてやられるだろうか…」ともう一生お会いする事もないと、もう古書あって一利なしの戦争だけは起こうぬ様に祈る者の一人です。

昭和十六年大東亜戦争が始まった時十歳だった私は、大阪の港区に家族大勢に囲まれ、幸せな少女期を過してました。今程物資は豊かでなくとも、人情のある子供心にも大好きな街並でした。初めシンガポール陥落の頃は、

に戦います」と勇ましく舌の上で挨拶し、歓声の声と旗の波に送られ戦場へ。学業半ばの次兄達、自ら志願して海軍予備生徒になり、家は両親、孫一人、やっと女学校に入った私の五人になりました。沢山いた店員、お手伝いの人は皆戦用で国へ帰り、娯楽が何もない



国民は戦勝に湧き、提灯行列などしましたが、段々物質が乏しくなり、配給制になる頃は衣料も切符制になつて、お金がいくらあつても買えぬ時代になりました。米が芋になり、豆粕、ナンバコなどは牛馬の餌だったのに。兎に角野菜などは、十何軒の隣組にわざかで、それを各家庭の人数分に分けるのです。大根葉の入った雑炊、ナンバコのはさばさのパン、その燃料も板擣はがし、木レンガ粗り起し、風呂など各家庭ではとても無理で町のお風呂さんは大繁盛。人を見たら泥棒と思えを地で行く時代故、衣類も結んで頭にぐぐりつけとかないと帰りはちびた履物も共きれなくなつてしましました。石巻もなく、湯湯のお湯は少ない上、人は一杯で片足入れたら後の片足は仲々入れられず、全く今の時代の人々に云つても想像も出来ぬ有様で、人々はそれでも軍國主義の教育のお陰で不足も云わづ唯黙々と堪え、文句も云わづ、今に神風が吹いて日本はきっと勝つと信じてました。

長兄は奥の軍港に徴用の後赤紙一枚で戦兵され、病死した兄妹との忘れ形見の幼ない子二人を両親に託して七度生れ替つてお国の為

つたので、本屋を訪ってた我家は繁盛し、出征軍人の奥さんが沢山パートで来てくれました。

やがてB29が編隊組んで大阪の空へ突入し、昭和二十年には二回に渡り大方焼きはられ、裏の市立運動場へトラックで運ばれた死体は重油をかけて焼かれたとか。間一発で田舎へ疎開してた私達は我家の消失の様子も見ず、唯一一人残って家を守っていた父も一度目の空襲で家を焼かれ命からがら遠い田舎へ三日がかりで自転車で帰つて来ました。

折角入学した学校と別れ転校した学校から学徒動員で毎日軍需工場で飛行機の部分品をやすりで磨き、何の為、女学校に行ったのやら、子供に勉強も教えられぬ私でした。両親は子供等に食べさせる為、どれ程の苦労した事でしょう。優しかった兄も再び日本の土を踏む事はありませんでした。我が子に会いたかったたるうの胸が痛みます。四十四年たつた今も忘れられません。



## 命こそ宝

●元ひめゆり部隊



分に与えられた使命だと思って、沖縄の戦争体験をお話しすることにしております。

沖縄と申しますと、今は底抜けに明るい太陽の下に青い空、青い海そして緑豊かな山々、その中に黄色や真赤な色彩やかな花が咲き、リゾートの島として自然の美しい、情熱のある沖縄の島を思い起つされることと思います。そして皆さん、リゾートの島へ泳ぎ、オゾンを吸いに、太陽を浴びに行かれますけれど、その陰に、沖縄には非常に大きな戦争犠牲があつたこと。その上に立つて今の幸福が築かれていると言つても過言ではないと思う程、苛酷な戦争があつたのです。私も、そういった戦争の悲惨さをのりこえて生きて参りました。「戦争体験が風化すれば、平和が達のく」ということを聞かされ、生き残った自

今を去る四十数年前、昭和二十年、太平洋戦争の末期、私は当時満17歳、沖縄師範学校の上級生でした。(三月)二十五日に卒業式を行え「卒業すれば学校の先生になるんだ」と胸をふくらませて希望に満ち溢れていました。けれど、その頃学童疎開の対島丸が沈没したり、四千人余り乗せた軍艦が沈没されたり、一九年十月十日には沖縄の大都市那覇が九〇%以上空襲にあつたりして大へんな時間だったのですが、それでも卒業を前にして私は乙女は希望に抱いていたのです。ところが、三月二三日から大空襲が始まり、怖ろしい地響きと共に爆雷が飛んで来ました。私たちは、當日頃走っていた運動場の隅にある防空壕に入つて一日ひそんでいました。

その夜、軍の命令が出て、野戰病院の看護要員として行くよう言われ、下級生を促し、衣装を変えたり髪の毛を切つたり「最後かも知れない」とみんな父母に遺言を書いたりして鞄に入れ、二四日未明運動場に集合して三百人近い先生と生徒が一丸となつて南風原

という所に向いました。陥じて細い道を軍隊やトラックが後から来る度によけ、又食糧や荷物をかつき、或は病人や年老をおんぶし、北部へ疎開して行く人とすれ違う乍ら、南風原に行きました。南風原という所は、沖縄の島の南にあります。そこには三十数本、太平洋側からも、南の方からも、東支那海側からも北部からも横穴式の壕が掘られ、仮の陸軍病院として使っていました。私は外科に配属となり、当時患者はまだ少なく、四、五十人しかいませんでしたので、みんな交替で衛生材料、宿泊、食糧運搬など兵隊が命がけでやつてしまい重い荷物運びも私たちが同じように使役に使われました。

そして、毎日壕掘りをやらされました。日々に患者がふえ、掘つても埋はすぐ足りなくなるからです。重いつるはしを置くと手がブルブルふるえてとまりませんでした。それでも弱音をほく者は一人もおらず頑張りました。三十日に卒業式をしてくれると、いうので慶びましたが、夜の十時頃になって、壕の中で一本のローソクをたよりに海ゆかばをうたって三十分程の簡単な卒業式でした。

卒業証書はまとめて總代が持っていて、壕に埋めたまま貯わすじました。

四月一日からアメリカ兵が島へ次々上陸して来ました。日本の兵士は全然抵抗しませんでした。日本軍の指揮する長官達が脚どつている首里城跡の周辺を守るために、沖縄の人達、十四、五歳から七十歳位迄の足腰の立つ男の人は皆召集されました。アメリカ兵は沖縄の様子を手にとるようにキャッチしていたらしく、アメリカ兵が上陸してくる所には日本兵はいなかつた說です。ブルドーザーで広い道をつくり戦争しながらどんどん進んで来ました。

純粹な気持で戦争に参加してきた沖縄の中学生連に砲弾代りに肉弾となつて地雷などを背負つたり、かかえたりして戦車の下にいて自爆していました。戦死の数字をみましても、日本軍は六千人、沖縄住民は二十万人以上で、車の三倍四倍は沖縄の住民をまさねえにした住民犠牲からなりたつた戦争でした。戦争中沖縄の住民は四五万人、ところが米軍は五十万人余りの兵力で来たんですねから、いかに無惨だったかおわかりいただける

と思います。

戦闘が開始されると、負傷者はどんどん増え、収容出来なくなり組つても組つても壕は足りません。掘り進んで向う側と貫通したり、最後に四十本余りの壕になつたと思います。

私の壕の二四号壕は第一外科でしたが、その壕は内科も伝染病科もみんな外科になつてきました。第三外科が脱出する前にガス弾でやられて全滅したので、その上に慰靈碑を建てて今のひめゆりの塔が建つてゐる訳です。私と同級生の二人、下級生二人の四人が外科に配属されたものの、最初のうちにこそ衛生兵、看護婦、付添兵がいて回診をしていましたが、包帯交換、治療も、一週間に一回から十日に一回、たまに忘れた頃に来た位で後は全然来なくなり、私たち要員が、看護から食糧に至るまでその全ての任に当りました。

米軍が島全体をとり巻いて大砲をドンドン打ち込んで来ますから、地上には無数に大きな穴があります。真赤に焼けた破片は馬でも人間でもスバーッと切り、胴体が離れて飛び散ります。松の木でもグサッと切ります。壕の中に入りきれなかつた人は一たまりもあり



ません。

壕の中にいる人も手当てが追いつかないので、傷ついたところからウジ虫に音をたてて喰われ、食糧もなく次々と死んでいきます。そのままにしておけず葬むるにも重くて運べないので胸と足を切り離し、大穴まで夜中に

運び出していくのです。機関に連するも涙も涙も出ないので。壕の中は死臭と汚物の臭いで充満し、今だたら本当に一秒といられないところです。外に出たのが見つかると全滅ですから、死体運びや汚物処理が大へんでした。食糧がつきてくると、人の出したわ小水も飲む程です。死んで行く入達から遺言書を託されましたが、「せめて土埋め」のは出来ませんでつた。

私も五月十三日足を負傷してしまいました。壕を廻われ何一つ持たず迷子になりました。壕は日本兵だとされているので、「行く先々の壕は日本兵で溝渠でどきにも入れてもらえ、す、壕から壕へ死体の土を運びそり廻りながら逃げ抜け、二十八日頃にやっと銷煙の壕に入れてもらいました。

「行く」に来て、六月一八日に解散命令が出来ましたが袋の頭で「行く所は海しかないのです。自由にしておられませ」と、「四、五人づつグルーブになって北部の国境という所に敵中突破していきなさい。しかし捕虜になってしまひませ」とでした。色々車に協力して来たので、塘つて機密がもれるからと、捕虜人はス

バイ飛びでした。負傷しているので同級生に助けられ、集中砲撃にも負けず、夜の移動で何とか海岸にたどりつけました。戦後私は捕虜になり、マラリヤにもかかり死ぬ思いでした。一、三年して恐怖症にかかりて便所に足を置いても死体をふみつけた事



### 集団疎開の想い出

●土師支部

矢野 利江



が浮んで来たり、薪を積んであるのを見ると死んでいる兵隊さんの姿になつたりして苦しみました。今もたくさんの中庭住民、兵隊さん、或いはアメリカ兵などたくさんの戦争犠牲者が地の下で平和を叫び、命の尊さを訴えていると思います。「命こそ宝」スチョンドタカラ——命は生きていることこそ禮うちがあるという話です。“一度と戦争があつてはならない”と言う思いで、話をさせていただきました。最後に「き憑師が作った靈魂歌を披露して、散った学友の靈に冥福を捧げたいと思ひます。

いわまぐら かたくもあらん 安らかに  
眠れどモ 拝る学舎の友は

「これは、一九四八年一二月二〇日に新潟支所平和委員会が主催した平和宣誓会で、新川さんが二時間に渡り心を込めてお話し始めた其講演の体験を抜粋再編集したものです。

生まれて始めて、両親の許を離れて暮のいた日々——一週間程は家が空しく、中良し同志が二人、三人と一ツ所に集まりすり泣く夜が続きました。

やがて、その生活にもだんだんとなれています。

あれは小学校5年の時、車の命令で地方に身寄りのない家の学童、特に高学年生はそれを学校や学年別に国が指定したところへ疎開するようにとのことで、私は尾道のひとつ手前の「松永」という駅で、町名はたしか今津町だったと思います。

小高い山の中腹にあるお寺で過した一年一ヶ月、あれることのない子供の頃の想い出です。

生まれて始めて、両親の許を離れて暮のいた日々——一週間程は家が空しく、中良し同志が二人、三人と一ツ所に集まりすり泣く夜が続きました。

やがて、その生活にもだんだんとなれています。

た頃、今度は土地の子供たちとの対立。都会育ちの私達は、村の子供のように、機敏に動くことができず、「役立たず、よそ者、それでいて生き虫ばかりだ」といじめられて、たんたん暗い気持ちで、沈んだ日々でした。そんな私達に、「みんな、つらいたるうが、戦争に勝つまで辛抱しようネ。もつと元気を出して頑張ろうネ」と、勇気づけて下さったのが、引車の先生とお寺の住職さんでした。

朝六時起床。ラジオ体操、お寺の掃除、ふむどにある井戸からの水汲み等、それぞれの班が当番で持ち回り役目を済ましてから朝食。それから、登校。かなりの道を歩いたと思う。授業を終えてお寺に帰り、夕食までは小さな手で洗濯したり、境内で遊んだり、夕食後一時間程、ご住職さんが私達に色々な話を下さる。九時になると、皆、床にはいる。裏山のふくろうや動物たちの鳴き声を子守り唄として夢路につく。朝は野鳥のさえずりで目覚め、一日が始まる。

中でも昭和二十年の夏の出来事は、今も心に焼きついて、生離死別とは言ひません。それからまもなく終

あれば、終戦も間近いとしてもムシムシと暑い夕方、お寺で私達をとても可愛がって下さったお姉ちゃんが、身体の半分を焼けただれ皮膚はボロボロ、髪の毛は抜け頭は引きつり、目だけギョロギョロ、手も足もまっ黒で、此の世の人ではないような姿でした。私たちは、我を忘れ呆然と見をするのも忘れて見つめていました。しばらくして我にかえり、皆口々に、「お化けが出た!!」と言つて騒ぎたてました。

夕食後、先生とご住職が本堂に私達を集め、「五日ほど前、広島にヒカドンという恐ろしい爆弾がね、広島市内の人々は皆死んで、動物はネズミ一匹、土の中のミミズやモグラ等、生き物をはじめ、草や木も全部死んでしまった事、そして、お姉ちゃんは、広島の市内からはずいぶん離れた工場で働いていたのだが、焼けた灰が身体にかかるてあんな身体になってしまったので、お化けではないから安心するように、そして、広島には二度と人間は住むことはできず、草や木も生えなくなる」とはならぬし」と話して下さいました。この言葉は、今も忘れる事ができません。それからまもなく終

戦になりましたが、お姉ちゃんは終戦を知らずに亡くなりました。

私は、十月も終わりに近く大阪へ帰りました。一年前の風景とは異なり、見渡す限りの焼野原で、その焼野原の中を、私は父の自転車にまたがり、戦争のはげしさを知り、友人が「両親を亡くして行くところがない」と言って困っていることを思い出し、私は両親が待つて居るのだと思うと、なんとか済まない気持ちがしました。

戦後の食糧難も、母のやりくりのおかげで、のり切り、現在に至り、今日を迎えてます。

くじくも、今年世界大会に参加させて頂き、四十年前、先生やご住職の言われた言葉がよみがえり、自然の力の偉大さをさまざまと見せつけられ、何事もなかつたかの様に木々は青々と育ち、草花の手入れもゆきとていておりましたが、私には、草花一輪一輪木立の一つ一つが、原爆で一瞬の内に数多くの方が亡くなられ、その人々が植物に姿を変え、今後二度と過ちをおかさないよう見定めている様に思いました。

人間が一人を殺せば殺人者と言われ重い罪

に服すのが当然なのに、国が戦をして数知れない犠牲者を出し、いまだに深い傷手を受け生活しておられる数多くの人々——私は憤りを感じ、本当に小さな小さな一粒の砂かもしけないが、一寸の虫にも五分の魂でがんばらねばと思い、夜の疊龍流に行き、一つの



登龍に灯を入れながら、二度と再び過ちをくり返すことはありません。どうか安らかに眠つて下さいと祈りつつ、水面にうつり流れ去る灯りに手を合わせてちかいました。

## 悔恨の青春

福田支所職員・佐々木  
潔さんのお父さん

佐々木和夫



私が記述するのは戦争体験と言うより戦時における軍人実験と言った方が適切かもしない。昭和十八年と言えば臨震急を告げる第二次大戦の最中、時の首相、東条英機大将が文科系の学生は國家総動員令に基き徵兵延期停止、勿論、私もその範疇にあつたので、学問研修の持続は認められず、学業半ばにして臨時徵兵検査を受け、第一乙種合格、海軍籍として登録、昭和十八年十二月十日（陸軍は

十二月一日）広島県大竹海兵团に入団、車隊生西は陸軍に比し海軍の方が苛酷だと言うことは耳にしていたが、入団式が始まるまで若干の日々を過ごしたが、その間、聞き耳を疑う程親切な取扱いだったが、入団式が終わり通常の日課通りに訓練が始まると、私の思い

は一通に吹っ飛んでしまった。聞きしに勝る苟葩さ、指導教官は上等機関兵曹（海軍と言えば機関科、整備科の扱いは有名な話）、彼の指導は厳しいが、人間的には非常に温厚のある方で、私は教選長係を命ぜられ折りにふれ彼の人間性を垣間見ることができた。

海兵团の生活は一ヶ月余であったが、その間の殴、独特的制裁、その為に自殺者、脱走者が相次いで起きたが、自殺者は戦死者、脱走者は軍法会議にまわされ片付けられたようだ。そう言う最中に予備学生の試験がおこなわれ、幸か不幸か、その試験に合格、私の場合、行先は関東州旅順と決まった。

昭和十九年一月下旬関釜連絡船にて金山に上陸・夜間同地より一週間かかる旅順に到着（一週間の日程は途中敵機の来襲を避けるため）向月三十一日第一期予備学生を入れ替わり、私たちが予備学生教育部に入った。（建物は日露戦争の戰利品だとのこと、當時としては立派な建物だと思った）。ここでは奇数分隊、偶数分隊と分かれ、訓練や日露戦争の戦跡観察、指導者教育としての實質の練習と、精神高揚を基調とした講義と戰闘訓練が日課

に基き行われ、毎週土曜日には分隊対抗の騎馬戦、棒倒し、それによって競争心を培い、敗けた場合は夕食は干され、「打ちてしまふん」の競争心の被培养者として洗脳される日々に明け暮れた。

一ヶ年余の基礎訓練を終え、その年の暮に日本に帰り奥海兵团所属になり業務遂行に専念、突然、米軍機の夜間攻撃をうけ、兵舎は完焼無きまで、焼滅状態になり、止むなく晴開、旬日後、広島に爆弾が投下された。午前九時過ぎたど思った。閃光・轟音、その方向を見ると、「きのこ雲」最初ガスタンクが爆発したのだろうと思ってねった、無名の爆弾が投下されたとの情報、後に「ビカドン」と次々に情報が入り乱れて入ってきた。程なく、本部から、その爆弾に対する予防対策の説明を受けた、後、毎日も経ない中に終戦の玉音放送を聞き、日本敗れたりの雰囲気が脳裏を直撃、悲痛の思いがして、唯々呆然、自失、我等予備は除隊と決まり兵役解除、車窓に映るのは無惨な爆撃の跡、目を瞑いたくなる悲惨な広島の姿、也国鉄構内の機関車の横転、戦争の無惨さが、痛く目に焼きついた。



今、私の青春とは何か？反復して見て、間違った観念の下に若者を戦争に駆り立て軍事訓練、厭従心の徹底化、それを遂行する為に精神的・肉体的な目に余る扱が行われた。軍隊では吸といわす指導と言うのである。ことある毎に軍人精神注入棒で男を打たれたり、酒に酔って豪華晴らしに殴られたり、飯を干されたりした。その為に、数多くの犠牲者がいた。軍隊とは一体何から考えても悔しさや悔恨の残る青春だったと思うが、今まで生きていなかったことが、せめても幸いだったと思う今日この頃である。

## 防空頭巾

●向ヶ丘支部

竹本 政子



戦争といえば、すぐ思い出すのが防空頭巾

と防空壕。防空頭巾は夏間は背中にぶらさげ、夜は枕元にきちんと置いて寝た。夜中でも空襲だといえは言にそのさわ擾の中へ逃げたものですが、不思議と頭にかぶった記憶はない。いつも背中にぶらさがっていたと思う。電気も夜は黒い布をかぶせたり、窓ガラスには障子紙がはられ、明りが外に漏れないようにしていたが、田舎なので一度も爆弾が落とされたこともなく、夜、西の空が赤くなっていることがよくあったが、それは高知市内が空襲で焼かれ燃えていたからだと教えられた。が、その時は空襲の恐れしさなど全くわかりませんでした。

小学校に入学した時、私のランドセルは摩紙でできていました。皮でないので母は不慎がついていましたが、ランドセルを持つている人が五人位しかいなかつたので私にしては異常でした。

学校にお弁当を持って行くようになってから、麦のご飯を食べるようになり、我家も貧乏になったんだなあと思いました。それ迄は白いご飯で、コウリヤンや外米はパットフライス(ポンチ子)にして食べてていたのですから。

五年生の時、家で私が一人で居ると大きなリュックサックを背負った薄汚れた男の人が来ました。私が生まれる前瀬がへ行つた私の上の兄だったので、歳が余りにも離れていました。私が生まれる前瀬がへ行つた私の兄のうちは兄というよりおじさんという感じでしたが、私が小さかったため他の姉兄よりも今でも私と同じ兄とは話をよくするように思う、又、兄もそう思っているようです。

今思えば何事も父の一言で動き、父親第一主義でしたから、戦後女と靴下は強くなつたといふけれど、母にどうては決してそうではなかった。今の私の自由気ままに行動できる十分の一でも、自由を正義母に与えてやられたいとよく思うことがある。父も母もよく戦争は何じもならぬと言っていた言葉が手に取るようである。この今の生活が頑くことを願つてゐる毎日です。



## 旧日本軍隊の体験記

●土師支部

久保田好太郎



自分は、昭和十八年一月十日、歩兵第三八連隊第一中隊第四班に現役志願兵として二〇歳の時に入隊しました。（歩兵第三八連隊は、後に二三部隊に改正されました）はじめに兵隊の一日の行動を記します。

- 1 起床時間 起床ラッパと共に（午前六時三〇分）
- 2 起床と同時に營庭にて点呼
- 3 点呼が終わり、すぐに「めじ上げ」の時間
- 4 食事準備が出来て食事
- 5 食事を終わって食器を洗う
- 6 そして、演習整列の命令、出発をする
- 7 演習を終わって隊に帰り、武器の手入れ

をする

- 8 夕食の「めじ上げ」の時間
- 9 夕食を終わり食器を洗う
- 10 入浴の時間があるが、初年兵などは、たまにしか入浴できない
- 11 夜の点呼前の内務班の掃除
- 12 午後八時 遊番士官の人員点呼
- 13 午後九時 消灯ラッパと共に就寝
- 14 消灯と同時に石廊下に不夜番が立哨する以上が一日の兵隊の行動です。

入隊して一週間位は古年兵も何にも言わないし、話して聞いていた程に厳しくないなあと心のうちで思っていましたが、一週間経りました。

班長が「もう、ほつほつ車隊生活もわかったまでも地方の言葉をつかうのをやめて車隊語をつかえ」とい、「俺とか私とかは軍隊語じゃないへ自分はマと見え」と命令。「お前たちば、今日から軍人精神を叩きこんでやる。わかったか。」と言う。やっぱりほつほつ始まつたなあと思った。

それから、来る日も来る日もビンタの連発。

感鳴られてはビンタピントの毎日、辛い日々が続く。勝手な行動は一切出来ない。たとえば、食事が済んで、古年兵が煙草をすすと言わないと初年兵は煙草も自由にすえない。慈地の悪い古年兵は、演習から帰り、銃の手入れをして、銃の引き金を引くのを防ぐ、そのままにして離くと、消灯して就寝してから引き金を押さえて見る慈地悪古年兵もいて、自分の銃が決まっているので、銃の番号を呼んで叫き起こされ感鳴られる。また、夜の人員点呼後、一品検査等をされて手入れ不良の場合などはビンタが飛ぶ事もある。

軍隊の用語では、兵舎の營庭側が、すなわち演習する表側が「舍前リシ・ヤゼン」と言い、兵舎のうしろ側は「舍後リシ・ヤゼン」といふ。全部古年兵に取り上げられ、食べられたりしまして、そして二ヶ月にして一期の換問がある。夜間行軍もあり、その結果の出来真合が報告される事になる。

自分が、昭和一八年、約六ヶ月余り過ぎて、

七月に第七方面軍として南方に出動、約一ヶ月位でシンガポールに上陸、その後スマトラ島に渡り、スマトラ横断鉄道建設部隊本部に配属された。月日がたって三〇歳から三五歳位の補充兵が入隊して来て、いかにも老齢のように見えたが、入隊して来たからは、年齢等関係なく、ビンタも飛ぶ事もある。常要の南方ではマラリヤ病にかかり、四十度から六十度まで熱が出で寝込んでしまうような事もあり、その外、いろんな病気等にもなる事もある。年月が経つて、自分は下士官として部隊本部におりましたが、山の奥に入つて勤務している兵隊等は、非常に辛い毎日だったそうです。

そして、昭和二〇年八月、終戦を迎えて、自分達は、昭和二一年六月二二日に名古屋港に復員上陸し、やれやれと思いました。二度と軍隊生活をしたくないなあとの心の底から思いました。

